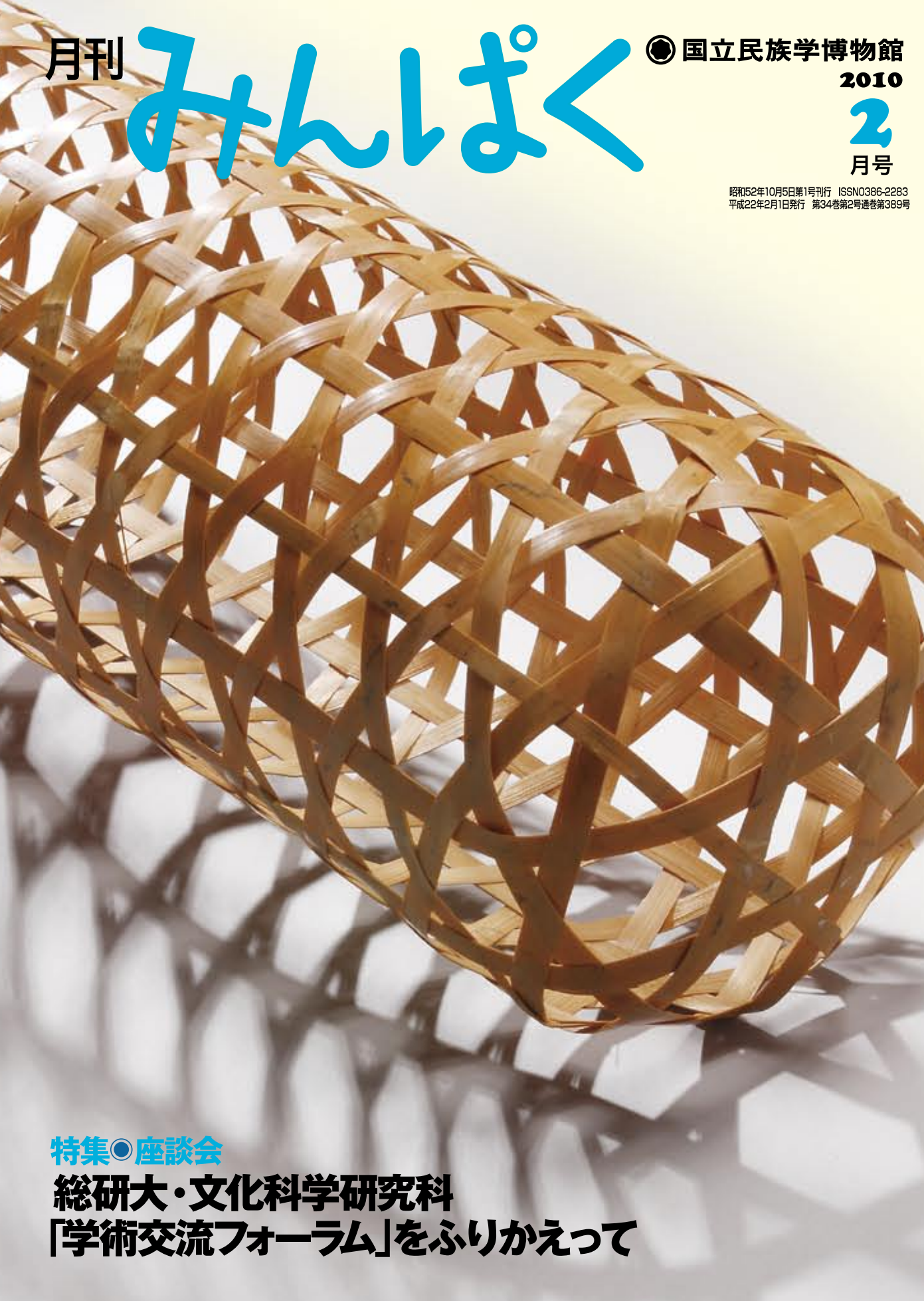
月刊みんぱく

◉国立民族学博物館
2010
2
月号
昭和52年10月5日第1号刊行　ISSN0386-2283
平成22年2月1日発行　第34巻第2号通巻第389号



特集◉座談会

総研大・文化科学研究科「学術交流フォーラム」をふりかえって

もくじ

1 エッセイ　世界へ◉世界から
古くて新しい路面電車
羽川 英樹

2 特集
座談会　総研大・文化科学研究科
「学術交流フォーラム」をふりかえって

8 モノ・グラフ
雲南の映像事情
伊藤 悟

10 地球ミュージアム紀行
東北学院大学博物館
大学博物館の資源は教授陣!?
加藤 幸治

11 表紙モノ語り
竹夫人
久保 正敏

12 みんぱくインフォメーション

14 万国 津々浦々
牌楼のないチャイナタウン
陳 天璽

15 時論 新論 理想論
躍動する中国で
――第一六回国際人類学民族学会議――
横山 廣子

16 多文化をささえる人びと
時代のさきがけとしての多言語放送局
FM COCOLO
庄司 博史

18 生きもの博物誌
干潟の小さきものたち
〈ミドリシャミセンガイ〉
飯田 卓

20 歳時世相篇
ハルマッタンの吹くころ
ナイジェリアの老アーティストの挑戦
川口 幸也

22 フィールドで考える
屋根葺きのカネを集める伝統的首長
飯髙 伸五

24 みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記

エッセイ　世界へ◉世界から

古くて新しい路面電車

羽川 英樹（はがわ ひでき）

近年また路面電車が見直されてきている。昭和四〇年代にモータリゼーションの台頭で各地で廃線に追い込まれたチンチン電車。日本で最初に走らせた我がふるさと京都でも昭和五三年にその幕を閉じている。

しかしそんな苦境の時代も歯をくいしばって耐え、今もなお元気に走り続ける路線が全国には二〇も存在するのだ。わたしの住む関西でも大阪の下町を走る阪堺電車、京都市内をのんびり走る嵐電（京福嵐山線）、浜大津付近を路面最長の四両（京都市営地下鉄乗り入れのため）で豪快に走る京阪京津線などが庶民の足として頑張っている。

また中国・四国に多いのも特徴だ。広島電鉄は「走る電車の博物館」といわれ、かつて大阪・京都・神戸・北九州で走っていた車両に今も出会える。また一九九九年に登場の低床連接車グリーン・ムーバーは熊本市電とともにＬＲＴ（次世代型路面電車）のさきがけとなった。

岡山電気軌道では「ＭＯＭＯ」という低床車が人気だ。設計はあのＪＲ九州の人気車両や和歌山電鉄の「たま電車」などを手がけた地元出身の水戸岡鋭治氏。木目調の車内にポストやテーブルなども設置し今までにない楽しさを演出している。

高知の土佐電鉄は創業一九〇三年と路面電車では最も歴史が古く、路面の営業距離も二五・三キロメートルと日本一を誇る。「欧州土電」とよばれるように、今もポルトガル・ノルウェー・オーストリアなどの市電が「はりまや橋」を縦横無尽に通過していく。

長崎電鉄は一九六四年に全国初の車体全面広告を敢行。現在の通常運賃一二〇円は全国最安値（〇九年九月までは一〇〇円だった）。これで毎年黒字経営とはあっぱれだ。

また数年前にウィーンで乗った市電にはびっくりした。日本では路面電車は道路の中央部分を走るが、ここでは歩道寄りに線路が敷設してあり、車が中央部分を走っていた。これだと乗客は道路中央の停留所で待たなくて、バス停のように歩道部分で電車を待てるので安全である。今後日本で新たにＬＲＴを作る際には、ぜひ参考にしてもらいたい事例である。

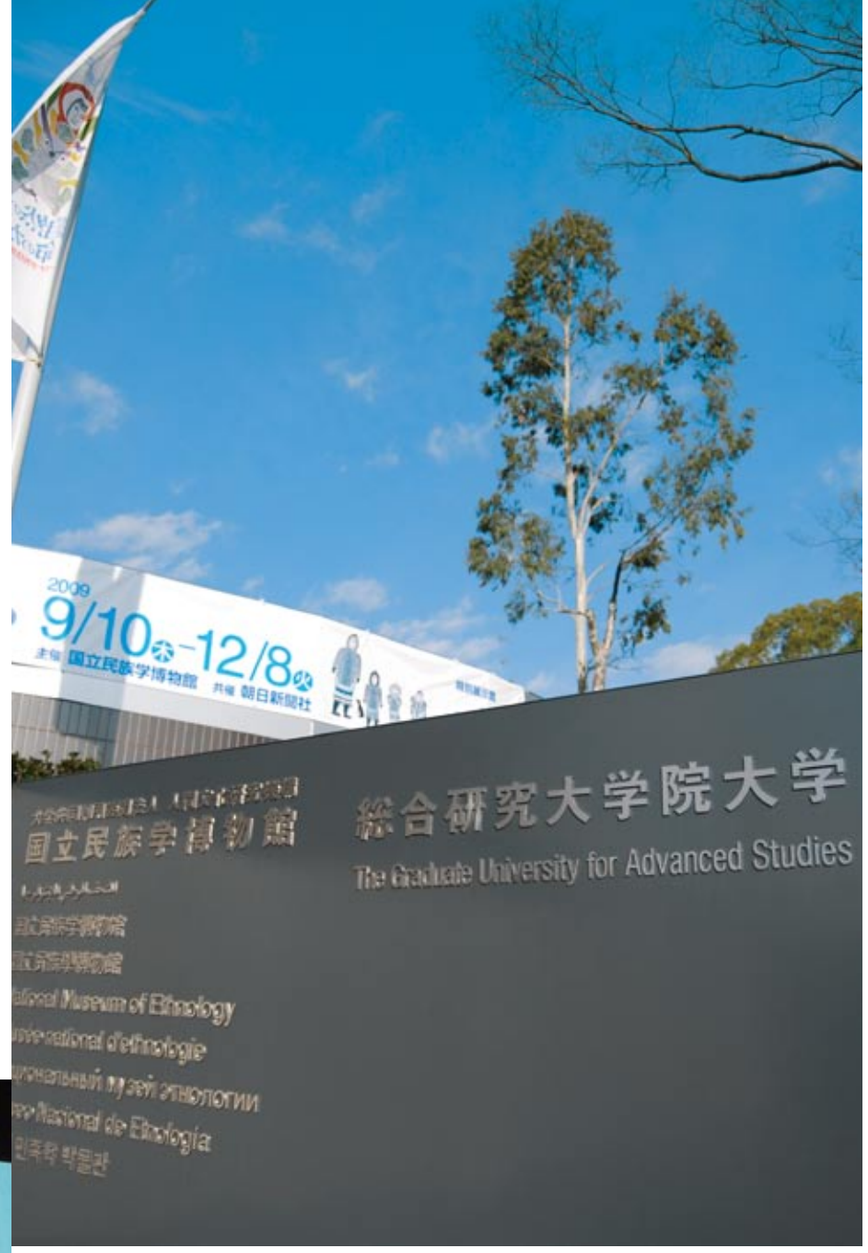
路面電車が見直されてきたのは、（一）渋滞に影響されにくい（二）環境に優しい（三）低床で高齢者でも乗りやすい……などの理由が考えられる。でもわたしにはそれプラス、あの独特の揺れ、ゆったり流れる車窓の景色、車内での方言交じりの会話などがたまらない魅力なのだ。

仕事柄講演で全国各地に出向くことも多く、路面電車のある町では主催者の迎えを断り必ず電車利用で会場へ向かっている。あと函館市電に乗れば、わたしの「路面電車全国二〇路線走破」は達成される。

フリーアナウンサー。1953年、京都生まれ。同志社大学文学部文化学科心理学専攻卒業。77年、読売テレビ入社。「11pm」、「2時のワイドショー」などの全国ネット番組を手がける。93年フリーになり、現在は関西を中心にテレビ・ラジオ番組を担当。またコミュニケーションや地域再生の講師としても活躍中。大の鉄道ファンで2009年に『鉄漫！ 関西ぶらり列車旅』（扶桑社）の著書もある。

特集◉座談会

総研大・文化科学研究科「学術交流フォーラム」をふりかえって



座談会出席者（五十音順）

大森 裕巳（おおもり ゆみ）
総研大 地域文化学専攻（民博）

荻野 夏木（おぎの なつき）
総研大 日本歴史研究専攻（歴博）

岸上 伸啓（きしがみ のぶひろ）
民博 先端人類科学研究部・総研大 比較文化学専攻教授

久保 正敏（くぼ まさとし）〈本誌編集長〉
民博 文化資源研究センター・総研大 比較文化学専攻教授

近藤 雅樹（こんどう まさき）
民博 民族文化研究部・総研大 比較文化学専攻長

サウセド・セガミ・ダニエル・ダンテ
総研大 比較文化学専攻（民博）

伊達 元成（だて もとしげ）
総研大 日本歴史研究専攻（歴博）

張 培華（チャン ペイホワ）
総研大 日本文学研究専攻（国文研）

陳 可冉（チン カゼン）
総研大 日本文学研究専攻（国文研）テレビ会議参加

梅 定娥（メイ テイガ）
総研大 国際日本研究専攻（日文研）

楊 爽（ヤン シュアン）
総研大 国際日本研究専攻（日文研）

歴博…国立歴史民俗博物館、国文研…国文学研究資料館、日文研…国際日本文化研究センター

学部をもたない総研大（総合研究大学院大学）は、六つの研究科・二三の専攻が各地の研究機関に設置されています。その基盤機関のひとつである民博には一九八九年、最初の文系の研究科二専攻（地域文化学専攻・比較文化学専攻）がおかれました。昨年一〇月、この文化科学研究科開設二〇周年を迎えて、民博で公開学術交流フォーラム「極限の文化――人はどこで生きているか　生きられるか」が開催されました。今号の特集では、フォーラムに関わった総研大の学生企画委員と教員が、共同利用機関としての民博と、教育研究の場である総研大のこれまでをふりかえり、今後について語りました

「極限の文化」を論じたフォーラム

近藤■今回の学術交流フォーラム初日は、定例の「みんぱくゼミナール」に組み入れて、大阪大学の廣川和花（ひろかわ わか）助教もお招きした座談会としました。ポスター発表と二日目のシンポジウムは、文化科学研究科の六専攻からそれぞれ選出された学生企画委員たちがコーディネイトしました。国立極地研究所（極地研）の渡邉研太郎（わたなべ けんたろう）准教授と、比較文化学専攻の岸上伸啓教授との対談をセットしたのは、学生企画委員の伊達さんでしたね。

伊達■南極と北極というふたつの極限の世界で、人はどうやって生きていけばよいのか、その際にどのような問題点・共通点があるのかなど、あい対する位置にある地域を研究されているお二人に、我々が知らない世界について話していただきました。特別展「自然のこえ　命のかたち―カナダ先住民の生みだす美」を開催中だったので、参加者もイメージを描きやすかったのではないでしょうか。いろんな地域からさまざまな知識や資料、価値観・視点が集まってくる博物館をベースにして、ふたつの極の話を聞けたのは有意義でした。

久保■「極限」というテーマは、学生が選んだのですか。

近藤■前回のテーマが「地域」だったことを念頭に、学生企画委員と相談して決めました。「極地」では、日本文学専攻などがなじみにくいので、精神世界も含めた「極限」ということを想定しました。

岸上■わたしにとってありがたかったのは、渡邉さんが理系の方だったことです。まったく分野のちがう方との対談は、かみ合った部分も、かみ合わなかった部分もあっただろうけれど、よかった。これは、総研大だからできたことだと思います。

近藤■渡邉さん所属の極地研には、総研大の複合科学研究科の極域科学専攻がおかれています。このフォーラムに他の研究科からゲストスピーカーをお招きしたのは、初めての試みでした。おたがいにとってよい刺激になったと思います。

南極大陸でフィールドワークを

近藤■昭和基地には、極地研以外からも参加できる公募枠があるということでしたね。

「みんぱくゼミナール」で報告する廣川和花助教（大阪大学総合学術博物館）

参加費用は七〇万円くらい……。

岸上■シドニーまでたどりつけば、あとはなんとかなるそうです（笑）。

南極には、まず探検の歴史があって、次に越冬隊の話があります。ケンブリッジのポーラ・インスティチュートでは、南極探検の歴史や探検家についても研究している。日本の場合は、研究者やマスコミの方が昭和基地に住み込んでいるけれど、お目当てはおもにペンギンや地質・オーロラです。人間のことは研究していません。

南極のすごさは、多くの国が乗り入れているのに、誰のものでもないことです。領有されていない。今後、世界がグローバル化するときの縮図になるかもしれません。すべてを、とりきめのうえでやっています。その意味でも場所的におもしろい。もうひとつの可能性は、調査隊員を調査することです。

近藤■佐々木高明（ささきこうめい）さんの面接をうけたとき「民博に来たら世界中どこへ行ってもいい。ただ、うちの研究スタッフがまだ誰も行っていない場所がある。南極大陸だ。そこで越冬隊を調査するのも趣向だぞ」と、いわれました。二〇年ほど前のことです。

陳■わたしは、学生企画委員を二年間つとめました。今回、初めて基盤機関の施設で開催したこと、しかも、一般公開したことが強く印象に残りました。民博の展示が観覧できるなどオマケの部分もあり、学術的な内容と専攻間の交流以外の部分でも、とても魅力的でした。

荻野■理系の先生をお招きしたシンポジウムは、正直、フタを開けてみないとわからないという気持ちでした。研究科内でお願いできたのも、民博以外では国文学研究資料館（国文研）の寺島恒世（てらしまつねよ）教授だけでしたし……。南極・北極に、日本文学系統の話がどうなじむのだろうと不安でしたが、寺島先生は鴨長明の『方丈記』などから、極限状態での創作活動を読み解かれたので「生きていくための精神的な活動とは」と、気になってきました。

人類学の先生から、アフリカへ行くときには必ず「歳時記」をもって行くという話を聞いたことがあります。「自分の研究に必要な、角度の違う視点や観察眼が養える」ということでした。本業の研究以外のものを、どう消化して本業にいかしていくのかを追求してみるのもおもしろいかなと思いました。

民博の一階エントランスでおこなわれたポスター発表

楊■学生企画委員になって学んだことは多く、とくに大事だと思うことが二点ありました。ひとつは、学生みんなで企画したこと。各地・各専攻から集まってきて、アイデアを出しあって、協力しながらイベントを形づくることを体験したことです。留学生が何人もいて、異文化の人たちが一緒に集まってひとつのイベントをつくりあげていくなかで、各自の行動のあり方や考え方を知ることができ、勉強になりました。

もうひとつは、学術交流フォーラム自体についてです。総研大は基盤機関ごとに専攻があって、いろんな分野の人たちとコミュニケーションできる、学び合える。その特色がこのフォーラムでも発揮できたと思います。先輩方のポスター発表・口頭発表を見ていて、自分もこういうふうに努力すればいいのだと思ったことが、たくさんありました。

近藤■学生のポスター発表の方が、教員のものよりデキがよかった（笑）。

サウセド■他の専攻の人たちに何をやっているのか見せたいので、簡単なことばで、わかりやすくなるよう考えました。学生としては、アピールもしたいので、パッションをいれるとか……。ビジュアルにも気をくばりました。

伊達■スタンバイしているときから「このポスター、誰がつくったの？」とか「ちょっと聞きたいんだけど」とかいわれて「一般の方たちの興味もかなりだなぁ」と実感しました。そういう場所で一生懸命説明するよい経験ができたし、研究内容をみてもらえ、総研大のことも知ってもらえてよかった。

久保■「サイエンス・コミュニケーション」は、理系にかぎらず人文系でも大切です。博物館という、一般の人が学問に親しみやすい場でもある民博で開催した今回のフォーラムは画期的だったというべきでしょうね。

近藤■閉会あいさつで、平田光司（ひらたこうじ）総研大学長補佐が「来年も、ホテルなどではなく基盤機関で開催した方がよい」と言われました。それぞれの基盤機関の特色をいかした味のあるフォーラムができそうです。

梅■わたしは二〇〇六年以来フォーラムにかかわってきました。留学生なので、日本人学生と一緒に仕事をすること自体が勉強になります。企画段階から役割分担して、協力しながらできるのが、とてもよいです。

張■わたしも二年目の委員です。今年は総研大の特徴をはっきり感じました。こういうフォーラムやセミナーに多くの人が集まってくる民博の、基盤機関としての実力をすごく感じました。そうした基盤機関に専攻を置く総研大が他の大学と違うところは、基盤機関にトップレベルの研究者がいて、大学のキャンパスと同じように連携していることです。

大森■わたしは新入生の企画委員で、何もかもが初めてのことばかりでした。普通、ポスター発表にはあまり人が来ないと聞いていましたが、今回は「みんぱくゼミナール」と組み合わせたことが奏効したようで、ゼミナール会場から出てきた大勢の人たちがポスター発表を聞いてくださいました。民博と共催した効果が大きかったと思います。

学生企画委員の苦労と役得

久保■企画委員だったからこそ経験できたことがある、異文化との交流などいろいろなメリットがあった、その体験を自分の研究に生かせそうだ、という感想がありましたが……。

伊達■それはみんな同じだと思います。

岸上■あるテーマを扱うときに、従来は自分の専門でしか語っていなかった。今回は、日本文学やアメリカの医療社会史研究など、いろんな視点からとり扱えました。これもやはり、総研大だからこそできることだといえますね。学際性や超領域を考えるなら、今後、新しいものをつくり出すには、こういうことが必要だろうし、その可能性が見えた気がします。テーマがよければ、すべての専攻や、専攻以外の人たちも参加してくるでしょう。新しい学問が誕生するかもしれない。

近藤■同じ研究科内でも、専門領域の異なる人たちが集まって、リフレッシュできる。

伊達■渡邉先生も「いつもは理系の研究会ばかりだけど、今回は文化的な話が聞けて、すごく刺激的で楽しかった」と、感想を述べておられました。単一専攻とか、文系だけとかいうのは、そろそろ限界かと。

テレビ会議参加者を交えての座談会（民博のセミナー室にて 2009年11月13日）

近藤■折紙や剪紙（せんし）アートなど、文系の発想を理系の学問に応用したら、いろいろと技術革新に役に立つものができるのだそうです。

久保■人工衛星の太陽電池のたたみ方などですね。

荻野■地震を研究していた寺田寅彦は、夏目漱石のもとに出入りして小説も書いていました。文理両方に鋭い感覚をもっている人で、植物の実が回転しながら落ちる現象の研究もあります。俳句などをつくるために自然を観察していて気がついたことを、物理的に解くことにも結びつけていたのだと思います。あまり文系・理系と言わずに壁を低くして交流できるといいですね。総研大には理系の人たちが大勢います。文系だけで囲わずに、こうしたフォーラムなどの機会に話を聞いてもらったり、聞かせてもらったり、総研大ならでは、できることがあると思います。

陳■わたしは江戸時代の漢文学を研究しています。儒者や漢学者の随筆をみると、やっていることが文学の分野だけでなく、もっと全般的です。専門的になりすぎないで、多様な興味を持った方が絶対にいい。

サウセド■学生企画委員には留学生が多かったのですが、会議は日本語で通しました。それもいい勉強・交流になりました。他の分野、他の機関との交流方法がそれぞれ違うので、その調整がとても大切なことだと知るいい機会にもなりました。

張■今後も各基盤機関が順番に開催するのがよいと思います。自分たちの研究と密接な関係がある環境で、各分野の研究者とも交流できます。経済的にもよいと思います（笑）。

大森■運営面ではデメリットもありました。所属機関が離れすぎていて、気軽に行き来できない。異分野交流という点では、有意義だったんですが……。

梅■わたしが入学した二〇〇六年は、フォーラムを始めたばかりで、誰も何もわからない。みんなが自由に意見を出しあって進めたのが刺激的でした。今年は経験者の荻野さんにすっかり頼りきって、他の人たちがあまり頭を使わなかったみたいです（笑）。マンネリ化もよくない。教員ももっと関心をもって欲しい。

荻野■企画委員の半分くらいは昨年からの続きで、今年はどうするかという進め方をしていました。それも意味があることですが、逆に昨年を引きずってしまって新しい発想が出てこない。後期から参加した大森さんから「これはどういう意図で?」「どういう趣旨で?」と改めて質問されて、ちゃんと説明していなかったなあと気がつきました。梅さんが言うように、初心に戻ってフォーラムの意義を考え直す、コンセプトから問い直すことも必要だと思います。

さて、来年は

荻野■昨年から感じていたことは、学生の企画に限界があることです。サポートがあってもうまくできないこともあります。企画をまとめるには、教員の協力が欠かせない。でも、そうすると教員主導になりかねない。そのバランスが難しい。

楊■中国でこういうことをやるときは、最初から責任を分散させます。役割分担を明確にしておいて、失敗したら「その責任者はあなただ」というでしょう。責任があいまいだと手を抜きたくなります。これは、まさに中国式の考え方かもしれません。日本式は、みんなで責任をもとうとします。二〇人いれば、二〇分の一の責任をもつ。どちらがよいのか、悪いのかではなくて、考え方の違いです。

今回のフォーラムでは、所与のテーマに対して、それぞれ異なるアプローチをしながらも、同じ目的に達することを学びました。文学作品からのアプローチ、病床からのアプローチ……。

結局、専門知識とは、アプローチの方法に過ぎないのでしょう。この経験を自分の研究にいかして考え方をひろげていきたいと思います。

陳■国文研と極地研は、同じ建物のなかにあるので、ロビーの大型テレビが南極の基地の様子を中継しています。以前は無関心でしたが、最近は、足をとめて眺めるようになりました。

基盤機関での開催は、他の専攻を理解するうえでも意義が大きかったと思います。何度も民博に通いましたが、民博の建物には、謎や知的な香りが、まだまだ、たくさん詰まっています。

二日目のシンポジウム会場風景

伊達■この事業のよいところは、学生がやりたいことを実現できる仕組みになっていることです。学生の意図を上手にくんで、総研大本部の事務局と各専攻の教職員がサポートしながら、学生たちに成功経験を積ませる効果的な事業になっていると思います。

近藤■学生企画委員は忙しくて大変だけど、立ち上げた組織のマネジメントを経験させて人材を養成する実践的なカリキュラムなのです。

久保■なるほど。どうも、ありがとうございました。

総研大　組織図（抜粋）

総研大各専攻が設置されている研究機関（基盤機関）の所在地

モノ・グラフ

雲南の映像事情

伊藤（いとう） 悟（さとる）
総合研究大学院大学博士課程、日本学術振興会特別研究員
専門は民族音楽学と文化人類学。主に中国雲南省と隣接地域ミャンマー（ビルマ）、タイ北部に住むタイ族の音文化、その変容を研究している。

来日した三名のタイ族民間芸能者と筆者（左）

民博で開催された特別展「深奥的中国」の関連イベントのひとつとして、二〇〇八年五月、中国雲南省の少数民族の歌と踊りを紹介する研究公演「タイ族のこころの調べ」がおこなわれた。徳宏タイ族ジンポー族自治州（徳宏州）のタイ族の民間芸能者三名が現地から飛行機を乗り継いで来日し、大阪や京都でも公演をおこなった。

わたしは現地からずっと三人の民間芸能者に同行し、彼らが日本の社会と文化に一喜一憂する姿を見た。歌の名手のタイ族のおかあさんとおじさんは、行く先々で感想を即興歌に表現して歌い、わたしはその姿をビデオに収めた。

その後、徳宏州に帰り、住み込み調査を再開したわたしは、空いた時間を利用して撮影した映像記録をDVDとVCDメディアに編集し、三人の親戚や友人に日本渡航記念としてプレゼントしたのだった――。

中国は、いまや急速な経済成長を遂げ、社会や文化も急激な変化のなかにある。一方で、CDやDVDの不正コピーなどの著作権侵害は、海外企業に甚大な損害を与えている。現在も一向に不正はなくならないが、村や街の人びとは、その「恩恵」を受けた生活を送っている。

「無名の英雄」

わたしが初めて雲南省昆明市に留学した一九九八年二月ころ、すでに巷では世界各地の映画の不正コピーVCDが氾濫していた。もっとも、正価品があまりにも少ないため、本物が偽物と間違われるという皮肉な出来事まであった。海賊版は安価なうえに日本では珍しい新旧さまざまな映画も手に入るので、お金のない若者たちに歓迎された。

驚いたことに、どの国の映画であれ、海賊版メディアには必ず中国語字幕が入っているのだ。友人はそうした海賊版のために翻訳をおこなう者たちを「無名の英雄」とよんだ。海賊版映画で育った若い世代のなかには、世界各地のドキュメンタリー映画に興味をもつ者たちも多かった。

ここ雲南省は中国五六民族のうち二五の少数民族が住む地域である。そのため、建国以来さまざまな少数民族記録映画がつくられてきた。雲南における人類学や民族学研究が隆盛に向かうなか、雲南大学に東アジア映像人類学研究所（East Asia Institute of Visual Anthropology）が一九九九年から二〇〇四年まで開設された。そこでは十数名の学生がヨーロッパから招聘した専任講師から映像人類学の基礎から実践までを学んだ。二〇〇三年三月からは隔年で、若者たちが中心になって全国規模の雲之南記録映像展が開催されるまでになった。

映像展のスタッフやNGOは、近年安価になったビデオカメラとパソコンを購入し、遠隔地の農村住民らに貸与して自らの手で自文化の記録映像を撮影・制作してもらうという、文化復興や開発、環境保護を実践する活動もおこなっている。

自主制作ビデオもかなり本格的な機材を使う

民間歌手フーカムが聴衆たちと歌を掛け合う

コピーされる娯楽の自主制作ビデオ

ビデオ撮影はなにも都市部だけの特権ではない。少数民族はこれまで、奇異な文化をもつ人びととして常にテレビ取材班や研究者から記録される側にいた。しかし近年では、自分たちの手で自文化を表象するようになってきた。

民族によっては、中年の男女ならば即興で歌を掛け合う文化をいまも保持している。残念ながら若者たちにはその技術は伝承されていないようだが、消えかかっていた即興歌の文化は、ビデオカメラの登場によって新しい娯楽として生まれ変わりつつある。

たとえば、農村では大金をつぎ込んで開催される結婚式や伝統的祝祭などに、名の知れた歌手たちを招いて一席歌ってもらう。場合によっては村人たちも参加した掛け歌大会に早変わりする。主催者は、そんな賑やかなハレの日を記念として映像作品に残す。注目すべきは、そうした自主制作ビデオは個人で所有されるのではなく、海賊版としてコピーされ、一般に向けて（勝手に）安く売られることだ。

日本にお招きした徳宏州タイ族の三人と同じく、タイ族のアイデンティティをもつ人びとは中国のみならず、ミャンマー（ビルマ）やタイ北部にまで広がっている。中国領内の自主制作ビデオはコピーが繰り返され、その海賊版は国境を越え、ミャンマー（ビルマ）や遠く離れたタイ北部で販売される。そうしたコピーメディアは、国家に対する抵抗や、故郷を離れて暮らすディアスポラの人びとのアイデンティティのよりどころにもなる。

ところで、わたしが編集した記念映像作品だが、三人の民間芸能者が有名だったため、もちろん、すぐさま海賊版として州内全土で売られはじめた。わたし自身はちょっとしか登場していないのだが、ときどきすれ違うおばさんたちに呼び止められ、その記念映像の内容について聞かれることもしばしばあった。

海賊版の自主制作ビデオやポップスが売られている店

東北学院大学博物館

大学博物館の資源は教授陣!?

教員の研究室や倉庫の棚などに保管されてきた大学の研究成果。これを活かす方途として大学博物館にいま、新しい風が吹いている。その可能性とあるべき方向は

加藤（かとう） 幸治（こうじ）
東北学院大学 文学部講師
専門は、日本民俗学とくに物質文化論。紀伊半島をフィールドに農山漁村の民俗技術の研究を進めてきた。最近は明治～昭和初期の郷土玩具愛好運動を調査している。

日本の大学における学芸員養成は、大きな転換点にある。資格課程を有する大学・短大は全国に三〇〇校以上あるが、法改正による教科の増加に対応するため、いずれの大学も教員の確保と実習施設や備品整備に苦慮している。

こうした厳しい状況をむしろ追い風ととらえて、二〇〇九年一一月一八日に東北学院大学博物館（宮城県仙台市）が開館した。大学のもつ歴史的資産を公開する博物館の建設は、本学文学部歴史学科創設から四〇余年来の悲願だったのである。

仙台市のメインストリートに面した東北学院大学博物館の外観

研究成果と一般社会とをつなぐ

大学の研究成果は、これまで各教員の研究室や倉庫、学内の研究所の棚などに保管されてきた。それらは死蔵とまでは言わないが、少なくとも市民の目に触れることはなかった。大学博物館は、大学の研究成果と一般社会とをつなぐ貴重な場となる。

シンボル展示は、社会科教科書に掲載されてよく知られている「墨書人面土器」である。古代の人びとが病気や災いを吹き込んで川に流したとされる土器である。常設展示は、発掘成果として賀篭沢遺跡（旧石器時代）、西の浜遺跡（縄文時代）、大塚森古墳、歓請内古墳、松島雄島中世板碑群、一関藩家老の境沢家の一括文書、初期キリスト者として高名な押川方義関連史料、東北地方の民具という内容である。

1606（慶長11）年の紀年銘があるおしらさま（東北学院大学蔵）

大学博物館の社会的責任

ある大学博物館で仕事をされている教授が、大学博物館の展示を担当することになったわたしに次のように話してくれた。「大学博物館の最大の資源はなんだと思う？　それは全学の教授陣ですよ。それぞれの教員は研究成果とともにさまざまなモノを保管している。それらをどれだけ市民の前に引き出せるか、それが大学博物館の社会的責任でもあると思う」。この助言は大学博物館の進むべき道筋を提示してくれる。

博物館は開館時の常設展示を作り終えると、とたんに硬直化するケースが多い。大学の教授陣を大学博物館の最大の資源ととらえるなら、各教員の研究の進展がそのまま展示の更新として反映されるような循環をつくらなければならない。研究を身近で見ている大学院生は、研究内容を市民にわかりやすく伝える解説員の役割を担う。開館業務を終えた大学博物館の課題は、こうしたシステムづくりである。

建設ラッシュの大学博物館

新たな大学博物館建設や総合博物館への拡大などの動きは、二〇〇〇年以降とみに盛んである。地域博物館の統合・閉鎖が進む一方、大学博物館建設ラッシュである。博物館界においては、新たなアクターの出現としてとらえられよう。

シンボル展示：多賀城市市川橋遺跡出土の墨書人面土器（東北学院大学蔵）

表紙モノ語り

竹夫人

国名：大韓民国
1995年収集
標本番号：L513（データベースには未登録）

久保正敏（くぼまさとし）
民博　文化資源研究センター

一見すると竹カゴに見えるこれは、韓国のチュクプイン（竹夫人）。抱き枕の一種で、暑くて寝苦しい夏、これを抱くとひんやりとし、風通しも良いので涼しく眠れる。しかしエアコンが普及した現在の韓国ではあまり使われず、土産用のアイテムとなっている。

抱き枕はもともと、蒸し暑い中国南部地域でタケや籐で作られ、夾膝（きょうしつ）とよばれていたが、北宋時代の政治家・詩人の蘇東坡が、漢の武帝の寵姫の一人の名前を借りて竹夫人と命名したと伝えられている。竹夫人はその後、東南アジアやインドなどにも広がった。植民地拡大の時代、ジャワを植民地としていたオランダ人が竹夫人を使うのを見て、イギリス人が、商売敵オランダをからかう言葉のひとつとして竹夫人をダッチワイフと英訳した、との説もある。

日本にも伝わって竹婦人（ちくふじん）とよばれ、夏の季語として俳句にも登場する。蕪村や子規の句もあるが、最近は、性具としてのダッチワイフにからめる句が多い。

ところで、この円筒状の形は、カーボンナノチューブの原子構造によく似ている。これは、炭素の層状結晶が髪毛の一万分の一ほどの大きさの円筒形になったもので、金属以上の熱伝導性、ダイヤモンド並みの強度、非常に大きな表面積などの特徴をもち、ナノテクノロジーの新素材として期待されている。六角形の網目の頂点に炭素原子が位置する結晶層が継目なく繋がり、筒の両端が閉じる部分では、五角形や七角形の網目構造をもつところも、竹夫人や竹カゴにそっくりだ。

このように、自然科学の対象と人文社会科学の対象のあいだに意外な類似性が見られるのは、今号の特集である総研大の目指すところと相通じるかも知れない。

INFORMATION
インフォメーション

春のみんぱくフォーラム二〇一〇年「西アジア再発見」

大村次郷写真展「西アジア、祈りの風景」
会期　三月三〇日(火)まで
場所　本館一階エントランス
観覧料　無料

じゅうたんをつくろう！
「じゅうたんを織ろう！」
実施日　三月二七日(土)までの火・木・土・日・祝日
時間　一一時～一二時
　　一三時～一六時
会場　本館一階エントランス
※申込不要。参加は無料です。

絵本読み聞かせ「絵本で旅する、詩の国イラン」
実施日　二月七日(日)
時間　一一時～、一四時～
会場　本館一階エントランス
※申込不要。参加は無料です。
以上、二件のお問い合わせ
情報企画課情報企画係
電話　〇六―六八七八―八五三二
(平日九時～一七時)

◆研究公演
「アラブ・アンダルシア宮廷音楽の響(かお)り―〈モロッコの花〉アミナ・アラウィの典雅な歌声」
実施日　三月二二日(月・振休)
時間　一三時三〇分～一六時
(開場一二時)
会場　講堂
定員　四五〇名
参加費　無料
参加申し込み方法
往復はがきに住所・氏名(返信用おもてにも)・年齢(任意)・電話番号・参加人数(本人を含め四人まで)・研究公演タイトルを書いて左記「企画連携係」までお申し込みください。応募者多数の場合は抽選となります。
申し込み締切り
三月四日(木)　必着
お問い合わせ
広報企画室企画連携係
電話　〇六―六八七八―八二二〇
(平日九時～一七時)

◆公開講演会
ベリーダンスが世界をゆらす―音楽と舞踊のグローバル・コミュニケーション
実施日　三月一九日(金)
時間　一八時三〇分～二〇時三〇分(開場一七時三〇分)
会場　オーバルホール(大阪・梅田　毎日新聞社ビル地下一階)
定員　四〇〇名(申し込み先着順)・手話通訳あり
参加費　無料
参加申し込み方法
「公開講演会参加」と明記の上、氏名・郵便番号・住所・電話番号・今後の講演会などの案内送付希望の有無を書いて、ハガキ、FAX、メールにて左記「研究協力係」までお申し込みください。
FAX　〇六―六八七八―八四七九
E-mail:koenkai@idc.minpaku.ac.jp
電話　〇六―六八七八―八二二〇
(平日九時～一七時)

「映像に見るイスラームの〈周縁〉」若手人類学者の民族誌映画上映会
実施日　二月一三日(土)
　　三月七日(日)
時間　一〇時五〇分～十六時四〇分(開場一〇時三〇分)
会場　第五セミナー室
定員　九六名
※申込不要。参加は無料です。
以上、二件のお問い合せ
研究協力課研究協力係
電話　〇六―六八七八―八二〇九
(平日九時～一七時)

●みんぱくワールドシネマ「トルパン」
実施日　二月二七日(土)
時間　一三時三〇分～一六時
(開場一三時)
会場　講堂
定員　四五〇名(先着順)
参加費　無料
※当日一〇時より会場入口にて整理券配付。
お問い合わせ
広報企画室企画連携係
電話　〇六―六八七八―八二二〇
(平日九時～一七時)

●国際研究シンポジウム「子どもたちにとっての未来社会―北欧の思想と実践」
実施日　三月六日(土)
時間　一三時～一七時(開場一二時三〇分)
会場　講堂
定員　四五〇名(当日先着順)
参加費　無料

●国際ワークショップ「広がる教育空間―子どもたちのウェルビーイングから考える」
実施日　三月七日(日)
時間　一〇時～一七時(開場九時三〇分)
会場　第四セミナー室
定員　八〇名(申し込み先着順)
参加費　無料
参加申し込み方法
「国際ワークショップ」と明記の上、氏名・電話番号・所属(任意)を書いて、メールにて左記までお申し込みください。
E-mail:suzunana-ken@idc.minpaku.ac.jp
以上、二件のお問い合わせ
鈴木七美研究室
電話　〇六―六八七八―八二九〇

●音楽展示・言語展示を改修のため閉鎖しています
期間　三月二三日(火)まで(予定)

＊詳細については、みんぱくホームページをご覧ください。

刊行物紹介

■岸上伸啓　編著
『開発と先住民』
みんぱく実践人類学シリーズ7
明石書店　定価：6,720円(税込)

世界各地の先住民は、国家や企業、NGOによる開発活動からどのような影響を受けているのか。また、彼ら自身はどのような開発活動を展開しているのか。本書は、世界各地における先住民に関係する開発の様相を紹介。

■窪田幸子・野林厚志　編
『「先住民」とはだれか』
世界思想社　定価：4,095円(税込)

20世紀の終わりになって、広く使われるようになった「先住民」という概念にこだわり、歴史的経緯を検討した上で、これまでの先住民の議論の中心となってきたオーストラリアなどの移民国家の少数者だけでなく、アジア、アフリカ、そして日本をふくめた「新しい」先住民にも対象を広げ、その多様性を同じアリーナで議論し、現代社会の少数者との関係性のあり方に迫る。

友の会

友の会講演会(大阪)
会場●国立民族学博物館
　　第5セミナー室
定員●96名(当日先着順、会員証をご提示ください)

第380回　2月6日(土)
時間●14:00～15:30(13:30開場)
ガンディーの大英帝国
講師　杉本良男(民族社会研究部教授)

第381回　3月6日(土)
時間●14:00～15:30(13:30開場)
アジアにとってのアジア
講師　田村克己(民族社会研究部教授)
アジアとは、何を意味しているのでしょうか。民博のアジアに関する展示も、いくつかの地域に分かれており、文化的に一括りにできるものではありません。アジアにおけるフィールドワークの経験から、アジアに住む人々がアジアをどのように捉えているのか、そして私たち日本人にとってのアジアとは何か、アジアが実態のあるものなのか。こういったことを一緒に考えていきたいと思います。

東京講演会
会場●JICA地球ひろば
　　第91回――セミナールーム202
　　第92回――セミナールーム301
定員●40名(申込制、下記「友の会」まで)

第91回　2月28日(日)
時間●14:00～15:30(13:30開場)
先住民の現在を読み解く(2)
先住民としての「権利」獲得とその後
講師　松山利夫(民族文化研究部教授)

第92回　4月10日(土)
時間●14:00～15:30(13:30開場)
文化人類学に生きる
―館長就任1周年を迎えて―
講師　須藤健一(館長)

国立民族学博物館友の会
電話　06-6877-8893
ファックス　06-6878-3716
電話でのお問い合わせは
月曜～金曜日9時から17時までにお願いします。
http://www.senri-f.or.jp/
E-mail
minpakutomo@senri-f.or.jp

ミュージアム・ショップ

ミュージアム・ショップでも「西アジア再発見」

「春のみんぱくフォーラム2010年　西アジア再発見」に関連して、中央・西アジアで暮らしを営む遊牧民たちが生みだした、色・素材・デザインともに個性あふれる織物の数かずを集めました。

伝統的な毛織物「キリム」を再利用し、現代風にアレンジしたポーチから、移動に最適な保管袋「チュバル」まで、民博のショップならではのお買い物をお楽しみいただけます。3月まで開催される多彩な「再発見」イベントのご参加の際には、ぜひお立ち寄りください。

「キリム」を再利用したポーチ(1,890円～)約80年前の保管袋「チュバル」(52,500円)など

国立民族学博物館ミュージアム・ショップ
電話　06-6876-3112
ファックス　06-6876-0875
水曜日定休
ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/
E-mail shop@senri-f.or.jp

みんぱくゼミナール

会場　国立民族学博物館 講堂
時間　13:30～15:00 (13:00開場)
定員 450名 (当日先着順)
参加費　無料
展示場をご覧になる方は、観覧料が必要です。

第381回　2月20日(土)
あたらしいアフリカ展示のメッセージ
講師　竹沢尚一郎(民族文化研究部教授)ほか
30年前に誕生した民博のアフリカ展示が、2009年3月、はじめて全面的に改修されました。アフリカを知らない人が見ても、アフリカ理解の手がかりを得られる、そんな展示にしたい。アフリカ展示チームは、そのような思いで展示作りに励んできました。「展示ができるまで」の熱い議論を、少しだけ紹介します。

第382回　3月20日(土)
トンガの王様と民主主義
講師　須藤健一(館長)
王権・貴族制と国民主権・代表民主制とが並存するオセアニアで唯一の王国、トンガ。9世紀に系譜をたどれる王家が社会経済的特権を独占していますが、国王は国民からあつく敬まわれています。この王国で起きている民主化運動をとおして、21世紀の島嶼世界に生きる人びとの生活戦略をみていきます。

牌楼のないチャイナタウン

陳 天璽（チェン ティエンシ）
民博 民族社会研究部
華僑・華人研究をはじめ、移民・マイノリティ研究、国籍・パスポート研究に取り組んでいる。人びとの移動にともなう文化の移動と変容、そして、個人と国家の関係に興味をもっている。

仰々しくそびえたつ牌楼（パイロー）は、世界各地で中国系移民の街のシンボルとなっている。街を訪れる人びとは記念写真というと牌楼を背景に選ぶ人が多い。中国系移民の研究をしているわたしは、海外にいくと必ずといってよいほどチャイナタウンを訪れる。気がつくと牌楼の写真をカメラに収めている。世界各地のチャイナタウンの牌楼は、どれもこれも似たり寄ったりだが、現地独特な味わいが見出せるような気がする。

●旧来の移民と新来の移住

チャイナタウンの牌楼をくぐり、域内の街を散策すれば、その国や地域の中国系移民の暮らしぶりを知ることができるかというと、そうとも限らない。中国系移民の人口流出は絶えず続いており、かつ多様化している。同じ中国系移民といえども、出身や生活レベルによってコミュニティの分化現象が起きているためだ。

各地のチャイナタウンを訪れると、牌楼が出迎えてくれるようなオールド・チャイナタウンは、その地域における旧来の移民を中心に構成されていることが多く、新来の移民たちがオールド・チャイナタウンを自分の生活圏に選ぶのはむしろ稀であることに気づく。ニューカマーたちは独自のライフスタイルに合った地域に住み、新たなコミュニティが形成されているケースも多い。

●アジア系ショッピングモール

先日、カナダのバンクーバーに行った際、飛行場まで迎えに来てくれた現地の友人が、「チャイナタウンに寄ろう」と空港近くにあるリッチモンドへ連れて行ってくれた。そこは、大型ショッピングモールが林立する商業地域であった。アジア系モール群としてはカナダ最大だ。日本で有名な一〇〇円ショップも北米第一号店を出している。ここには牌楼などない。その代わりといってはなんだが、地域一帯には駐車場が完備されており、ヨーロッパの高級車が並んでいる。モールのなかは、香港や台湾、中国の物産などを売る店舗が並んでおり、売る人も買う人もアジア人ばかりだ。生鮮食品売り場は、カナダでは手に入れることが難しい食材が多いため特ににぎわっていた。モールの入り口では、中国語で声高に台湾の震災援助の募金活動をしており、今さっき自分がアジア圏から一〇時間かけてカナダについたのが嘘のようだ。モール群をみて「これがチャイナタウン?」と思っていたわたしも、市民向け講座や託児施設など地域内の中国系移民に関する情報量や施設の豊富さを見て、渋々うなずかされる面もあった。

●チャイナタウンの未来

屋内のモールはエアコン完備のため気候に左右されることがない。便利かつ洗練された雰囲気は若者や家族連れ、そして富裕層に人気が高い。リッチモンドのニュー・チャイナタウンを好む人が増えたため、ダウンタウンにあるオールド・チャイナタウンに衰えがみられるという声も聞く。牌楼をくぐると街路の両側に小さな商店と看板が林立するオールド・チャイナタウンとモール型のニュー・チャイナタウン。ふと、日本における商店街の衰退と大型スーパー店の台頭が重なった。人びとが便利さを求めるぶん、小道を散策しながらのひそかな楽しみや人情味に触れる機会が少なくなっているようで、ちょっぴり寂しい感じもした。

モントリオールのチャイナタウン

リッチモンドのニュー・チャイナタウン

躍動する中国で

――第一六回国際人類学民族学会議――

横山 廣子（よこやま ひろこ）
民博 民族社会研究部
専門は文化人類学。中国雲南省と隣接する地域に住む人びとの社会組織、文化変化、民族意識、民族間関係などを研究してきた。広い意味での社会環境と個人の意識や行動との関係に興味がある。

●一年遅れで開催された会議

二〇〇九年七月二七日から三一日まで中国雲南省の昆明で、第一六回国際人類学民族学会議（ＩＣＡＥＳ）が開催された。この会議は自然人類学と社会・文化人類学の両方を含む人類学・民族学研究の国際的な議論と情報の交換の場として一九三四年から始まった。当初は四年に一度、東京で開かれた一九六八年以降は五年ごとにおこなわれている。

二〇〇八年の昆明開催が正式決定したときの中国の関係者の喜びようは、規模は小さいながらオリンピック招致を連想させた。しかし皮肉なことに、そのオリンピックを万全に開催するために、二〇〇八年の春以降、一定規模以上の国際会議の開催を中国政府が認めなくなったという。五月初めに七月の会議延期の知らせが届いた。一年遅れの開催が判明したのは、二〇〇九年一月である。

●人類、発展、文化多様性

今回の大会のテーマは中国語で「人類、発展、文化多様性」。人類学が射程とすべき今日の世界の諸問題を大きく包み込んでいる。

閉幕後の発表によると一〇〇近い国や地域から四三〇〇名余りが参加し、分科会は一八〇を超えた。生態環境の維持、女性や民族を含む少数派の社会参加や権利の拡大、文化的多様性の確保、そして経済発展と文化をめぐる報告が多かった。映像人類学関連の比重の大きさも目立った。分科会数で全体の約一二パーセントを占め、その他に二三篇の民族誌映画が上映された。映像は、ときにことばにできない現実も人びとに伝えることができる。

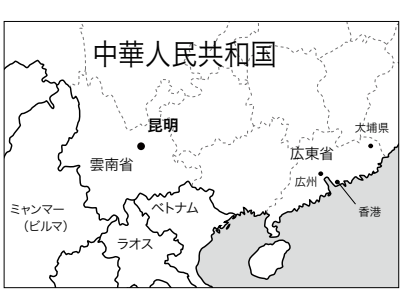
期間中、六つの展示が開催された。「多彩な中華――中国の少数民族」、「中国人類学民族学の百年」は内容豊富だった。世界の土着文化を展示する「世界本土文化展」は、中国の資料が大半を占めた。たとえば日本からのアイヌに関するパネル展示、イランからの民族衣装の展示が、広東省大埔（ハッカ）県の客家の写真展とともに並べられており、呼びかけに応じて提供されたものの寄せ集めという感は否めない。しかし眺めているうちに、かえってそこに社会そのものを感じた。統一のゆるやかさが多様な現実を映し出していた。

活気があった分科会「ナシ族研究の新しい地平」

●ひらかれた人類学へ

私が参加・傍聴したなかでは、ミャオ／モンやナシ研究といった、中国国内に居住する民族名を冠した分科会の熱気が印象的であった。当該民族出身の研究者や民間芸術に携わる人びとが多数参加していたほか、海外からも研究者に加え、ＮＧＯとして開発援助に関わる人びとなど多彩な人びとが揃った。関係者がインターネットを介して日常的に交流する場がすでに形成されていることも盛り上がりの一因と思われた。難民として合衆国に渡ったモンのなかから研究者が育ち、ラオスのモンの調査報告をしていたし、中国の研究者の、自民族のアイデンティティや社会変化のなかでの民族文化の維持・発展に関する発表には、情熱とともに研究の深みが感じられた。

社会変化や科学技術の進展にともない、人類学の研究自体がよりひらかれた場に導かれ、調査者・被調査者の関係や視点が多様に交錯するなかで今後の研究が展開していくことを改めて感じた会議であった。



映像の放映とディスカッションの分科会も多数開催された

多文化をささえる人びと

時代のさきがけとしての多言語放送局 FM COCOLO

一五年まえ関西を中心に放送をはじめた多言語放送FM COCOLOの試みは画期的なものであった。ターゲットを在住外国人にしぼり、彼らのことばで語りはじめたのである。困難をかかえながらも多民族化・多言語化する社会のさきがけでもあった

庄司 博史（しょうじ ひろし）
民博 民族社会研究部
言語学・言語政策論。二〇〇四年に特別展「多みんぞくニホン」を企画。近年は移民言語や多民族化の諸現象に関心をもっている。共・編著書に『多みんぞくニホン』、『ニホンの言語景観』など。

一九九五年秋、FM COCOLO（ココロ）との遭遇はちょっとした衝撃であった。関西の、それも民放FM局が一三もの外国語を用いて放送をはじめたのである。

大阪市に日本最大の集住地をもつコリアンの存在は、当時から広く知られていたが、彼らのことばとて日本人が直接きくことはまれであった。まだ韓流ブームのはじまる前である。そこに一般の人びとにはほとんどなじみのないポルトガル語やヒンディー語が公共の電波を通して流れはじめたのである。

当初、番組は対象国ごとに放送時間がわりあてられ、母国話者のDJたちが、本国のニュースや日本の生活情報を日々伝えていた。わたしには通勤の車のなかで曜日ごとにかわるさまざまなことばの放送を聞くのがたのしみになった。ことばの中身がわかっていたわけではない。母語アナウンサーが故郷の音楽とともに関西在住の仲間に直接語りかける口調は、いかにも多言語社会の到来を予感させるようで聞いていて心地よかったのである。

ふたつの役割

開局が阪神大震災のあった年であることから、情報不足で苦境にあった外国人住民への救済策として設置されたものとしばしば誤解されるが、震災以前から企画は進んでいた。増加する外国人住民とともに、観光やビジネスで日本に滞在する外国人への情報提供という使命もあった。

とはいえ、FM COCOLOは、開局とともに非常時下での多言語情報サービスという役割を偶然に経験することになった。まだ地震後の混乱のなかで戸惑いと不安のなかにあった外国人に、故郷やことばを共有する人びとの存在を感じさせる意味でも大きな安らぎを与えたはずだ。

当時のFM COCOLOには、多言語放送が関西の国際化や活性化につながるという出資者やスポンサーの前向きの期待と支援もあった。そして、FM COCOLOはもうひとつの役割を果たした。それは多様なことばや文化的背景をもつ外国人に活躍する場を提供したことである。

それまで日本語のみで運営されていた放送メディアに、外国人が自分たちのことばで同郷者に語りかける機会はまずなかったといえる。当時、ほとんどシロウトに近かった外国人スタッフのなかにはその後、さまざまな才能や経験を活かし、今日、他局での番組出演やメディアコーディネーター、観光大使など、国際交流にかかわる分野で活躍している人が少なくない。タイ出身の松尾カニタさんもそのような多才な人物の一人である。

大阪南港WTCビルのホールに面したFM COCOLO局。ホールからスタジオもみることができる

＊ 周波数:76.5MHz:（近畿二府四県の都市部で聴取可能）
http://www.cocolo.co.jp/pc/w_top.php

パーソナリティー・松尾カニタさん

古くからのCOCOLOリスナーなら、松尾カニタさんを知らない人はまずいない。すくなくとも彼女のなめらかで、ちょっと鼻にかかった日本語には聞きおぼえがあるはずだ。多言語放送の理念に賛同し番組制作にかかわり、みずからも母語であるタイ語放送のDJとして情報を発信し続けてきた。タイに関連する番組に加え、現在は海外在住経験のある人びとへのインタビューで構成する日本語番組も担当している。リスナーはもちろん、インタビューされる側も彼女の話術についひきこまれ、あっという間に時間がたってしまう。

松尾カニタさん。翻訳家、関西の都市・文化行政関連の委員としても活躍している

番組収録中の松尾カニタさん。現在、タイ人向けの番組（水曜朝6:30）と、海外情報番組「Heart Lines」(土曜朝7:30)を担当している

大学生として初めて日本を訪れ、あらためて慶應義塾大学の大学院に留学して以来、約三〇年日本にくらす松尾さんの活動はじつに多彩だ。NHK第一放送の多文化情報番組のDJ、大阪市人権推進委員会委員など外国人への理解を促進する活動のほか、都市計画にも国土審議会委員などとしてかかわっている。現在はタイ観光局のHPを通じ、タイ情報を日本人に伝える仕事もまかされている。

そういう松尾さんにとって、活動の原点ともいえるFM COCOLOは切っても切れない存在であるようだ。松尾さんが欠かさず続ける担当番組からは、情報の仲介者としての意欲がいつも感じられる。

多言語放送先駆者としての試練

FM COCOLOは今年で開局一五周年をむかえる。不況にもかかわらず日本に在住する外国人は増え続け、いまや開局当時の一・六倍になった。日本語を学び、たとえ意思疎通に不自由しなくなったとしても、コミュニティをささえるという点で母語の重要性はなくなるものではない。

とはいえ、民放の多言語放送局にとって、この一五年は試練の連続でもあった。近年の大不況は民放を支えてきたスポンサーに大打撃をあたえている。さらに多言語放送局には、外国人という限られたリスナーの増減はスポンサーの数にはねかえる。

そのような事情から、外国語になじみのない日本人をリスナーとして取りこむ番組編成にある程度向かうのは避けがたいことである。言語コミュニティに向けた番組は朝と夜にふりわけられ、全体として音楽番組や日本語トークが増えることになった。外国語放送にもしばしば日本語の要約がそえられる。

とはいえ、FM COCOLOは多言語放送局という理念をおろしたわけではない。言語の数はひとつ減ったとはいえ、非常時には在日外国人に緊急情報を即座につたえる態勢もとのえている。むしろ、多言語放送局としての理念を維持する道を懸命に模索しているあかしであろう。

レギュラーに一二もの外国語番組をもつというのは日本の多言語FMのなかでも他を圧倒している。これは外国人スタッフの理念への共感と支援があったからにほかならない。

一五年をふりかえって松尾カニタさんはいう。「日本社会がかわったところ？　うーん、すくなくとも外国語への拒否感は以前に比べて減ったのでは？」。FM COCOLOが時代を先取りしていたことは、確かなようだ。

2009年9月スマトラ島沖地震の際は、在大阪インドネシア総領事が来局し、インドネシア語で現地の被害状況や義援金の受付情報をつたえた

干潟の小さきものたち

〈ミドリシャミセンガイ〉

有機物や栄養塩類が豊かに堆積し、微生物から渡り鳥まで多くの生物を守り育てる干潟では、多様な食物連鎖が展開する。その生態系の一員のミドリシャミセンガイは、カイの名がつくが貝ではない

ミドリシャミセンガイ

飯田卓（いいだ たく）
民博 文化資源研究センター

漁撈技術、漁撈における慣行と規範、漁家経済の変化などを視点に、奄美大島や八重山諸島、マダガスカルなどの漁村を訪れ、人間の営みと自然との関わりについて研究する。

奄美大島で貝類調査をしていたときのこと。潮が引いた昼どきの干潟に、二人の女性が出ていた。一人は足が悪いらしい。いつものように、どんなものを探しているのか見せてもらった。干潮時に干潟を歩いている人は、日本でもマダガスカルでも、こころよく話をしてくれる。

足が悪いほうの女性は八三歳で、体がなまってしまわないよう海に出ているだけだと言った。もう一人の初老の女性は、つき添いの隣人だった。

「でも、こんなものも拾っていますよ」と言って見せてくれたのは、メタリック・グリーンのあざやかな殻をもつ小動物。ミドリシャミセンガイである。貝類に似ているが、軟体動物とはまったく別系統の動物だ。奄美大島北部ではツム（爪）またはツムンニャ（爪貝）、ツムックワ（爪ちゃん）などとよばれる。なるほど、マニキュアを塗った爪のようにきらきら光る。

「食べてごらんなさい、おいしいから」

言われるままに、殻から長くとび出した柄の部分（肉茎、三味線に見立てれば棹の部分）を口に運ぶ。太いモヤシくらいの大きさで、こりこりと歯ごたえがあり、悪くない。酢味噌あえにするとよいと聞き、なるほどと思った。汁にすると、最高のだしがとれるという。

潮干狩りの達人

次つぎとシャミセンガイを掘り当てる老人をまねて、やみくもに地面を掘ってみるが、まったく見つからない。

「小さな穴が三つ、一列に並んでいるのが、ツムの隠れているところ」と説明するうちにも、老人の獲物は増えていく。目をこらして掘ってみて、ようやく二個、三個と掘り当てた。土ごとつかんで掘りあげるとき、固着していた柄が地面からぶちっと離れるのがわかる。

一〇分ほどして、老人は帰ろうと言いだした。わたしは、つき添いの女性と話しながら歩きだすが、ふり返ると、帰ろうと言いだした当人が、またしゃがみこんで穴を掘っていた。潮干狩りは、好きな者にはなかなかやめられないものなのだ。

学童たちも、シャミセンガイの干潟で課外学習をする。後景には、人工的に潮だまりをつくる石垣が見える。かつては、この潮だまりで魚をひろっておかずにした

モースが設立した江ノ島の臨海実験所（黒の矢印）。1877（明治10）年頃〈出典・写真集図説集刊行会編『図説ふじさわの歴史』藤沢市〉

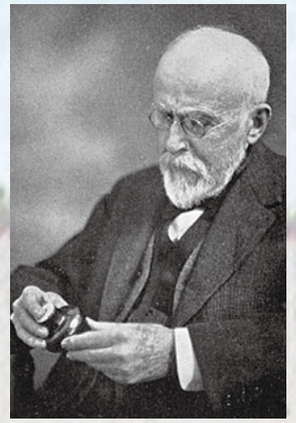
シャミセンガイとE・S・モース

じつはこのシャミセンガイ、人類学とも関わりが深い。アメリカ人エドワード・S・モースが明治時代に日本にやって来たのは、このシャミセンガイを研究するためだった。モースはのちに、東京帝国大学の動物学研究室を創始し、大森貝塚を発見して縄文研究を開拓した。また、日本滞在中に集めた民具をもち帰り、セイラム・ピーボディ博物館に収めた。この資料をもとに、民博では、一九九〇年に特別展「海を渡った明治の民具」を開催した。

モースが日本ではじめてシャミセンガイと出会ったのは、彼が日本初の臨界実験所を設置した江ノ島海岸だった。生物学者によれば、こうした珍種が江ノ島にいたことは、今となっては大きな驚きだという。海岸線の人工化が、いつのまにかシャミセンガイを希少種にしてしまったのだ。

同じことは、民具についてもいえる。好景気と不景気をくり返し、さまざまな理由で暮らしが変化するうち、気づいてみると、身のまわりから消えてしまったものが少なくない。生きものたちへのまなざしは、わが暮らしへのまなざしにも大きく重なる。

特別展「海を渡った明治の民具」のちらし。約140点の民具が展示された



エドワード・S・モースは、動物学者であると同時に、日本の縄文研究やアイヌ研究、民具研究にも先鞭をつけた人類学者だった〈出典・『Edward Sylvester Morse』（1942, by Dorothy G. Wayman）横浜開港資料館所蔵〉

ミドリシャミセンガイ

Lingula anatina

腕足動物門舌殻綱舌殻目シャミセンガイ科シャミセンガイ属の代表的な種。潮間帯の砂泥地中に生息する。2枚の殻をもつ点で貝類に似るが、まったく別系統の動物で、固着のための器官である柄（肉茎）は殻に収まらない。干潟の埋め立てとともに数が減少しており、環境省のレッドリストのカテゴリーでは準絶滅危惧種に分類される。有明海に生息する同属のオオシャミセンガイは、絶滅危惧Ⅰ類。いずれも、有明海では「メカジャ」とよばれ、食用にされてきた。

歳時世相篇 23

ハルマッタンの吹くころ

ナイジェリアの老アーティストの挑戦

アフリカ最大の人口を擁するナイジェリア。乾季になると、北方のサハラ砂漠からハルマッタンとよばれる北風が吹く。その名を冠したワークショップをひきいるのは、ブラック・アフリカを代表するアーティスト、オノブラクペヤ。一九六〇年のナイジェリア独立直後から活躍する老アーティストの意気は北風にもひるむことはない

川口幸也（かわぐち ゆきや）
民博 文化資源研究センター
専門はアフリカ同時代美術、展示表象論。美術を通して、アフリカの内と外でアフリカがどのように語られているのかをテーマとしている。

アフリカ大陸の西端セネガルから、海沿いに東へコートジボワール、ガーナ、さらにナイジェリアに至るまで、ギニア湾に面する沿岸および内陸の国々にでは、ほぼ一一月から三月の初めにかけての乾季になると毎年、はるかサハラ砂漠から季節風が吹いてくる。

ハルマッタンとよばれるこの風は、砂漠からやってくるから熱風だと勘違いされやすい。だが、じつは乾いた北風であり、この季節になると朝晩などはセーターなしではいられなくなる。ときおり朝早く、背の高い木々のこずえを真っ白い朝霧が包みこんでいるさまを目にすることがあるが、一瞬雪が降り積もっているのだと錯覚してしまう。それほど肌寒いのだ。

しかも砂漠の微細な砂塵を運んでくるため、少し街なかを歩いただけで、唇は割れ、喉は乾き、髪の毛はぱさぱさになる。ただし、熱帯の強烈な太陽の光を和らげてくれるから、昼間はいくぶんしのぎやすいという利点もある。

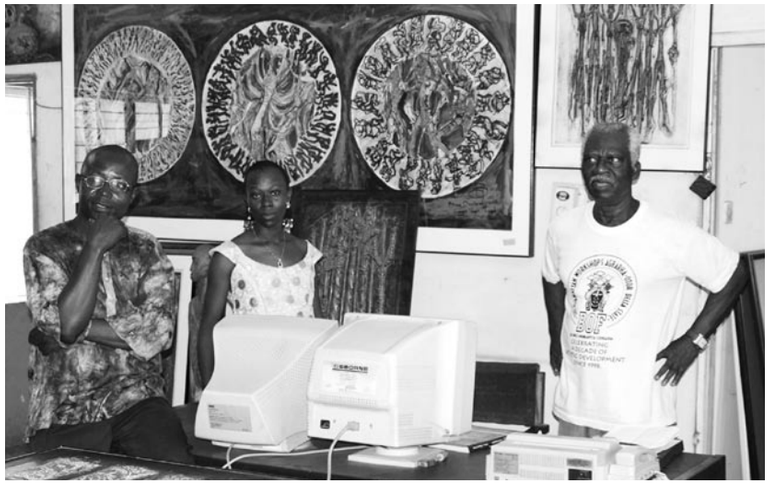
「ザリアの反逆児」の一員として

この西アフリカの乾季の風物詩ハルマッタンの名を冠したアートのワークショップが、一九九八年以来毎年、二月から三月にかけて実施されている。場所はナイジェリア南東部、ニジェール川河口のデルタ地帯に位置する小さな町アバラ＝オトール。対象は主に国内の若手のアーティストたちである。主宰しているのは、ナイジェリアを代表するアーティストとして国民的な人気を誇るブルース・オノブラクペヤだ。

一九三二年、アバラ＝オトールに生まれたオノブラクペヤは、長じて美術を志し、一九五七年にナイジェリア北部の古都ザリアに移って、現在のアーマズ・ベロー大学美術学部で美術を学んだ。ここでウチェ・オケケら、のちに「ザリアの反逆児」とよばれ、独立後のナイジェリアの近代美術を担うことになる逸材たちと出会ったのである。

卒業後、彼は、イバダンで小学校教師をするかたわら制作に励み、やがて、リノリウムを使ったレリーフ（浮き彫り）や、自分を育んでくれたウロボ文化の伝統宗教の祭壇に取材したインスタレーションを発表するなど独自の境地を切り拓く。

そして一九九〇年には、世界の現代美術界の最高峰たるヴェネツィア・ビエンナーレに、ブラック・アフリカから事実上初めて招かれた四人のアーティストのひとりとして名前を連ねたのである。今日では、彼の作品は欧米をはじめ、世界じゅうの主だった美術館や博物館で見ることができる。わが民博もそのひとつである。


オノブラクペヤ（右端）とその家族

ワークショップ自体がお祭り

さて、ハルマッタン・ワークショップだが、このワークショップは絵画、彫刻はもとより、染織、版画、陶芸、鋳金、宝飾にいたるまで、幅広い分野にわたっている。参加者は各コースに分かれ、コースごとに内外から招いた講師の話を聴き、また仲間うちで議論を重ね、実際に作品をつくり、それらを展示する。もちろんいくつかのコースを梯子することも大歓迎だ。

こうしてひととき、若手が先輩のアーティストから学び、また若者がたがいに交流し、刺激しあう場が立ち現れるのである。

ハルマッタンの時期はまた、ヤシの実の収穫の季節であり、とくにデルタ地帯では魚にちなんだ多彩なお祭りがおこなわれる季節でもある。各地からやってきた参加者にとっては、このデルタ地帯の風物を見聞するまたとない好機なのだ。そのうえ、いまではこのワークショップ自体が、アートをテーマにしたひとつのお祭りになっているという面もある。

老アーティストのパワーの源

それにしても、いわば功なり名を遂げた老大家といってよいオノブラクペヤが、八〇歳近くにもなって、なぜ若手のためのワークショップにこれほどこだわり続けるのだろうか。なにしろ日本と違って、平均寿命の短いアフリカでは七〇や八〇といえばたいへんな年寄りなのである。

その謎を解く鍵は、たぶん彼の若い時分の体験にある。

一九六〇年代の初期、つまりナイジェリアの独立直後である。西部の大都市イバダンでは、当地に住むオーストリア生まれのドイツ人ウリ・バイアーが、地元の若いアーティスト相手にワークショップを定期的に開いていた。

その参加者のなかに、小学校で美術を教えていた青年オノブラクペヤの姿があったのである。独立して間もない当時のナイジェリアにあって、新しい国家にふさわしい国民文化を創出することは、とくに血気にはやる若いアーティストたちのあいだでは、分野を問わず最優先の課題であった。

オノブラクペヤもそうした若者のひとりであり、そんな彼の熱い心を、ワークショップの講師たちの話はおおいに鼓吹したに違いない。このときの胸躍る鮮やかな記憶が、いまなお彼を駆り立てているのではないかと、わたしは思っている。

北風に立ち向かって

かつて北のヨーロッパの植民地主義に壟断（ろうだん）されたアフリカ諸国の歴史を踏まえて、「自分で唇を舐（な）めないと、また北の方からハルマッタンが吹いてきて唇がひび割れてしまう……」という意味のことをいったのは、たしかナイジェリアの作家チヌア・アチェベである。

独立して以来、手さぐりで国造りに邁進（まいしん）してきた自分たちの経験を、あとに続く若者たちに語り継がないと、二一世紀のナイジェリア文化はまた北からやってくるハルマッタンに飲み込まれ、分断されてしまう――このワークショップには、オノブラクペヤのそうした憂いも込められているのではないだろうか。

ハルマッタン・ワークショップというのは、いろいろなことをわたしたちに考えさせてくれる、なかなかに味わい深いタイトルである。

フィールドで考える

屋根葺きのカネを集める伝統的首長

ミクロネシアの島嶼国家、パラオ共和国。アバイと呼ばれる伝統的集会所は、かつて首長たちが寄り合いをおこなう場であった。植民地期から国家形成期にかけて、首長の政治的実権は後退を余儀なくされたが、現在でもアバイの存続をかけて、首長たちはカネ集めに奔走する

飯髙伸五（いいたか しんご）
日本学術振興会特別研究員PD（筑波大学）
専門は社会人類学、オセアニア民族誌学。ミクロネシアにおける植民地経験、現代の土地訴訟と伝統的知識の関係などを研究テーマに、パラオでフィールドワークを実施している。

アバイと伝統的首長

石畳の上に建つ伝統的集会所、アバイ。パラオの伝統を体現するこの切妻造りの建築物は、奥行きが約二〇メートルもあり、破風（正面の装飾板）や梁（屋内の水平の柱）には、神話や伝説をモチーフにした彫刻、装飾が色鮮やかに施されている。

かつて、アバイには、集落の伝統的首長が寄り合いをおこなうものと、村落の若者が寝泊まりするものとがあった。前者は、通常一〇人いた集落の首長たちに帰属し、首長の序列に応じて座順や使用する出入り口が定められていた。また、新築・改築する際に、首長たちがどの部分の骨組みや葺き屋根を負担するのかも、序列に応じて定められていた。

ところが、一九世紀末以降の植民地統治過程で、首長たちが寄り合いによって政治を運営する機会は失われた。これに伴い、多くのアバイは消滅していった。現在では、国立博物館に移設されたものも含めて、伝統様式のアバイは、わずか数棟だけである。集落のアバイが新築・改築されたとしても、地方政府の資金で近代様式に建てられることが多い。

それでも、伝統的首長は、近代国家のなかで一定の権威を保持しており、伝統文化の番人としての役割を果たすこともある。わたしはフィールドワークの最中に、首長が、伝統様式のアバイの修繕のために、屋根葺きのカネを集める場面に居合わせた。

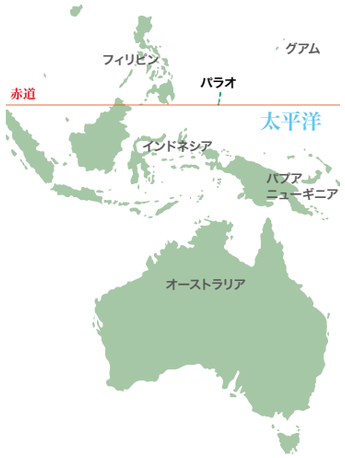
屋根葺きのカネの支払いに集まった人たち

屋根葺きのカネ集めに参加して

二〇〇九年九月、アイライ州のある集落の首長R（七〇代、男性）から、宴への招待状がわたしのもとに届いた。この宴は、アバイの屋根の葺き替えの費用を集めるとともに、かれの自宅の改築費用を集めるために計画された。前者は、屋根を意味するパラオ語にちなんでロス、後者はハウスパーティーとよばれている。ロスは、伝統領域に属する事柄であり、他の集落の首長とともに、首長Rにも修繕の割り当てが定められた。

招待状には、屋根葺きには一万一千米ドル、自宅改築には一万三千三五〇米ドルを要したと明記されていた。この多額なカネを集めるために、氏族の成員が広く参加を求められた。首長Rと同じ氏族に属するEさん（八〇代、女性）の家に居候していたわたしは、Eさんとその娘二人とともに宴に参加することになった。

宴といっても形式はほとんどなく、午前一〇時ころから午後三時ころまでのあいだ、ばらばらと首長Rの家に人びとが集まり、タロイモや豚肉の入った弁当を受け取り、食事と会話を楽しみ、カネを支払って帰って行くというものである。首長Rは、この日のために豚を屠殺させるなど、参加者の食事の準備に追われる。支払われるカネには、パラオの通貨である米ドルと、トゥルクとよばれるべっ甲皿の伝統貨幣とが使用される。



家のなかで歓談する人たち。奥では首長が見守るなか、カネ勘定がおこなわれている

パラオ共和国アイライ州のアバイ。屋根の葺き替え前

多くの参加者は、家の外に置かれた椅子やベンチに腰掛けているが、家のなかには首長Rの家族と氏族の年長女性が控えており、会計係が集まったカネを勘定している。

どれだけのカネが集まったか？

パラオでは、出産儀礼や葬儀、家の新築・改築祝など、現在では日本語からの借用語でシューカンと総称される機会において、カネの支払いを怠るべきでないと考えられている。Eさんは、すでに夫を亡くしており、決して経済的な余裕があるとはいえない。それでも氏族のなかで最年長の女性で、首長Rとのつながりも深いため、支払いの責任がある。Eさんは、現金一〇〇米ドルとべっ甲皿一枚を支払った。個人の支払いとしては、そうとう高額であった。

わたしとEさんの娘たちが支払った金額、当日はつごうで来られなかったEさんの息子から預かった金額は、いずれも二〇米ドルから四〇米ドルであった。なかには五米ドルで支払いを済ます者もいれば、親子あるいは兄弟姉妹であわせて五〇〇米ドルも支払う者もいた。集められたカネの明細は、丹念に大学ノートに記入され、宴の終わりに首長Rに報告された。ノートは、支払いの記録として、しばらく大事に保管される。

この日、個人、親子、兄弟姉妹など合計七四の名義で集められたカネは、総額五七〇〇米ドルとべっ甲皿四枚にもおよんだ。この時点では、まだ必要な金額には遠くおよばなかったが、パラオの所得水準を考えれば、これは大金である。後日に支払った者や、海外から送金した者もいたので、総額はまだ増えている。首長の呼びかけに応じて、着々と多額のカネが集められていったのである。

支払いにあてる米ドルとべっ甲皿を確認する

近代国家のシンボル

パラオ共和国の立法、行政、司法の各機関の公式ロゴは、どれもアバイをモチーフにしている。アバイは、もはや首長の寄り合いの場ではなくなったが、近代国家の文化的シンボルとして重要な意味を担っている。ここで取り上げたアイライ州のアバイもまた、パラオの名所のひとつとして観光ガイドにも掲載され、国家の歴史保存プログラムでは史跡に指定されている。州政府も、アバイの修繕のために、予算を組んでいる。

しかし、アバイは、なによりも集落の首長たちの財産である。だからこそ、首長Rらは、自分たちのアバイの修繕費用を、国家や州政府とはまた別の回路で、すなわち氏族の成員からカネを集めることで、なんとか賄おうと試みたのである。もっとも、貨幣経済が浸透した現在では、集める側も支払う側もカネの負担は大きく、政府の援助にまったく頼らずにアバイを維持管理することは難しいだろう。伝統文化の番人である首長たちが、いかなる対応をしていくのか、今後も注目したい。

石畳の上に建築中の近代様式のアバイ（オギワル州）

編集後記

今月号では総研大（総合研究大学院大学）の設立二〇周年に関連して、学生と教員たちを交えた座談会を企画した。国立民族学博物館に設置された文化科学研究科の二専攻（地域文化学専攻と比較文化学専攻）のこの二〇年の歩みは決して順風満帆ではなかったが、それでも文化人類学・民族学に関連する分野の優秀な人材を数多く輩出してきたことは間違いない。

ただ、近年の学生たちの研究内容を見ていて、少々気になることがある。それは研究テーマの多様性が徐々に狭まっている印象を受ける点である。現代の焦眉の問題（環境、多文化共生、グローバル化など）に関心を集中させるのはいいが、同時にもっと興味の対象を広げるべきである。ただ、その責任は学生だけにあるのではないかもしれない。まず、指導する教員側の関心に多様性がなくなってきている。そして、文化人類学・民族学の研究対象となる人びとの社会、文化にも多様性が失われてきているのだろう。

人口増加と環境破壊で狭くなっている地球を、人類はますます狭く使おうとしているような気がする。（佐々木史郎）

次号の予告

特集 ふたつの「みんぱく」

月刊みんぱく
2010年2月号
第34巻第2号通巻第389号　2010年2月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話　06-6876-2151

発行人　西尾哲夫
編集委員　久保正敏（編集長）　佐々木史郎　庄司博史
中牧弘允　信田敏宏　山中由里子
協力　財団法人 千里文化財団
制作　京都通信社
印刷　市蔵図書

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館企画連携係にお願いします。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

みんぱくウィークエンド・サロン 研究者と話そう

●予定時間　14時30分から15時30分（予定）。
●常設展示場観覧料が必要です。
＊都合により、予定を変更することもあります。

国立民族学博物館（みんぱく）の研究者が、来館された皆様の前に登場します！
「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別！
どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしています。

2月の開催

2月7日（日）
話者：鈴木紀（先端人類科学研究部准教授）
話題：チョコレートに託すもう一つの愛情
場所：アメリカ展示

中央アメリカ、ベリーズ国南部のカカオ畑

2月14日（日）
話者：水野信男（兵庫教育大学名誉教授・本館共同研究員）
西尾哲夫（民族文化研究部教授）
話題：中東の音楽風土を探る
場所：西アジア展示

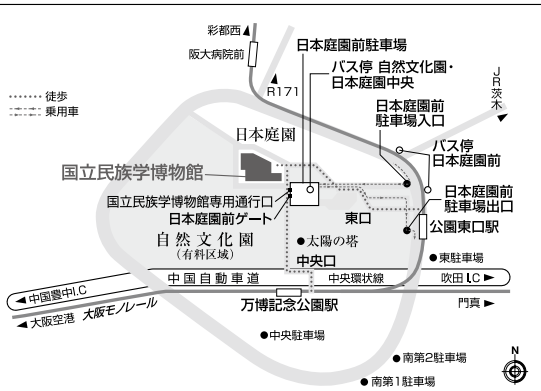
2月21日（日）
話者：山本泰則（文化資源研究センター准教授）
話題：ビデオテークのむかし、いま…
場所：常設展示入口

2月28日（日）
話者：韓敏（民族社会研究部准教授）
話題：トランプから見る中国文化のあり方
場所：中国地域の文化展示

1年間みんぱくに何度でも入館できる
「みんぱくフリーパス（3,000円）」をご利用ください。
常設展は何度でも無料で入館できます。他にも、みんぱくを楽しむための特典がいっぱいです。

特典◆常設展の無料入館◆特別展の観覧料割引
◆みんぱくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引　など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
（電話06−6877−8893／平日9：00〜17：00）



交通案内
●大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
●阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください）。
●自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」（有料）から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
●タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れできます。

みんぱくホームページ
http://www.minpaku.ac.jp/